NIKKEI Network
ニッケイ・ネットワーク
海外日系人協会だより
2022 NO.54 SEP.

第62回海外日系人大会「日系社会の持続可能な発展と日本」総合テーマに今年もオンラインで開催

当協会は10月22日(土)、23日(日)の2日間にわたり、「日系社会の持続可能な発展と日本」を総合テーマに、第62回海外日系人大会を開催する。昨年末より、東京での対面・集会型開催と、昨年度初めて実施し好評を得たオンライン開催とを組み合わせたハイブリッド形式での開催を模索し関係各所と調整を行ってきたが、開催時期に日本の水際対策が完全に撤廃となる見通しが立たず、海外からの参加者数を予測することが困難であること等から、昨年度に続き、今大会もZoomウェビナー形式によるオンライン開催とした。

Withコロナ社会と日系社会のこれからを考える

大会初日の開会式は、政府代表等来賓の挨拶のほか、各国日系社会からの報告(ビデオメッセージ)、および基調講演を行う。基調講演には、ブラジルの法学者・弁護士で日系一世の二宮正人氏(サンパウロ大学教授・当協会評議員)をお迎えし、新しい時代における日系社会の活性化や未来像について考察していただく。

大会2日目は、「持続可能な日系社会を目指して一実践と成果」と題したシンポジウムを行い、①「多彩な活動を広げる日系コミュニティ」、②「日系人に関する教科書記述内容および学習活動の現状と課題」、という2つのテーマでそれぞれパネルディスカッションを実施する。

パネル①「持続可能な日系社会を目指して一実践と成果」は、当協会常務理事(日本記者クラブ前専務理事)の中井良則氏をモデレーターに討議を行う。各地の日系団体が抱えている、文化継承や高齢化、人材育成などの課題は、コロナ禍によってより切実な形で顕在化したが、この危機を乗り越えさらに持続可能な発展を遂げるために、各地の日系団体でどのような取り組みが行われてきたのかについて、様々な分野の実践例を紹介いただきながら日系社会の将来について展望する。

また、パネル②「日系人に関する教科書記述内容および学習活動の現状と課題」では、当協会常務理事(武蔵大学教授)のアンジェロ・イシ氏をモデレーターとして、令和3年度に当協会が行った、小・中・高校教科書における移住、日系人、日系社会等に関する記述内容調査の結果について発表するとともに、広く日系に関する教育活動の現状に焦点を当て、日系人・移住学習の理論と実践について討議する。

日本国民に日系社会の重要性を認識してもらうためには、日本の教科書の中で移住、日系人、日系社会等について質的・量的に十分な記述が行われることが極めて重要であることは論を持たない。様々な教材を使った授業実践が報告されているが、教育の場は学校だけでなく、博物館・資料館等の社会施設の活用も有効な手段となる。こうした取組みについて実践例を報告し、日系社会側からの意見・コメントも聴取したい。

東京での対面・集会型開催を軸としたハイブリッド形式の開催については残念ながら断念することとなったが、オンライン開催の利点を活かし、より多くの国や地域からの参加と活発な討議を期待したい。

参加登録受付中!

9月1日より、当協会WEBサイトにて第62回海外日系人大会の参加者登録を開始している。参加費は無料で、事前登録制(参加資格:日系人並びに同大会の趣旨に賛同する方。国籍不問)。タイムスケジュール等の詳細についても、決まり次第順次WEBサイトで発表する。(「海外日系人大会」で検索)

3年ぶりの来日研修を実施
「日本文化活動コーディネーター育成（基礎）」コース

仲間たちと過ごした時間はかけがえのない経験

この度、コロナの感染拡大が始まった2020年以来3年ぶりに来日研修が実現したJICA日系社会研修「日本文化活動コーディネーター育成（基礎）」コースの研修員が、約1カ月間の研修を終え9月7日に帰国の途についた。

来日したのは、アルゼンチン、ブラジル、ボリビア、パラグアイの日系団体や日本語学校などで活動している5名。日本文化や歴史に関する基礎知識を学び、日本文化活動を通じて日系社会および地域活性化のための活動案を作成することを目標に、さまざまな講義や視察に参加した。

よさこいイベントにスタッフとして参加

日本ではコロナ第7波の勢いが収まりを見せない状況下での実施となったことで、コロナ以前の同コースで実施していた関西方面への視察旅行などは断念せざるを得なかったが、それでも秋葉原の歴史とポップカルチャーを学ぶ街歩きや、古都鎌倉、浅草での視察、和太鼓、着物、伝統工芸、和食調理、そば打ち体験、よさこいイベントのスタッフ体験など、盛りだくさんのスケジュールをこなし、研修員たちは大満足の様子だった。

集客性のあるイベントの企画を

アルゼンチンから参加した儀保メリッサ千咲さんは、昨年度オンラインで実施した同コースにも参加していた。今回、オンライン研修とは異なり、実際に日本でいろんな場所を訪れ、たくさんの人たちと出会えたことについて「来日できて本当に嬉しかった!」と笑顔を見せた。

メリッサさんが活動しているのは、まだ新しく立ち上がったばかりのメンドーサ日系人協会。まずは人を集めるために、集客できるイベントの企画が何より大切だと感じており、今回の研修で学んだ和太鼓や和食づくりなどは、たくさんの人に興味を持ってもらえるイベントになりそうだと期待している。また、コーヒーをたくさん飲む南米でも、コーヒーゼリーはほとんど知られていないそうで、「イベントで販売したら人気になりそう」と話した。

日本の妖怪は子どもたちにウケそう!

ブラジルから参加した伊那坪井カレン理恵さんは、2016年にJICAの次世代育成研修に参加した経験がある。中学生だった当時とは異なり、日本語学校の教師という立場で参加した今回の研修について、「本当にたくさんの学びがありました」と振り返る。

習字では自分の名前のひと文字にトライ

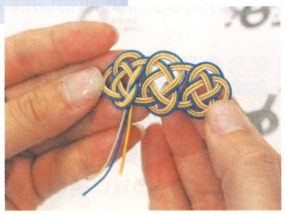
普段は子どもたちにひらがな、カタカナ、日本の文化などを教えているというが、今回の講義で学んだ日本の妖怪について、「これは子どもたちが絶対に興味を持ってくれると思います!アマビエなど日本の自然・風土に深く関係している妖怪がたくさんいることを知りました」と嬉しそうに話した。

日本に来られて本当によかった

おふたりに、コロナが収まっていない状況で日本に来ることに不安はなかったかを聞くと、「アルゼンチンでは誰もマスクなんてしていないので、来日前は絶対に陽性にならないように気を付けて過ごしていました。逆に、日本ではみんなマスクをしているので、全然心配していませんでした」（メリッサさん）、「いつもNHKのワールドニュースを見ているひいおばあちゃん（曾祖母）が、日本の状況をとても心配してくれていましたが、私自身は、誰もコロナを気にしていないブラジルよりも日本のほうが絶対に安全だと思っていました!」（理恵さん）とのこと。

さまざまな制限付きでの研修だったため、遠方に住む親戚宅を訪ねることなど、残念ながら叶わなかったこともあった。それでも、来日研修で同じ志を持つ仲間たちと出会い、語り合い、様々な場所を訪れたくさんの時間を共にできたことが、何よりかけがえのない経験になったと話してくれた。

つまみ細工で作った髪飾り


水引の体験授業

◀メリッサさん

「和食調理実習では、里芋がなければじゃがいもを使うことなど、アルゼンチンでは手に入らない日本の食材を、どんなもので代用できるかについても学びました。つまみ細工の講義で作った髪飾りはとってもかわいくて、端切れ布でこんなに素敵なものが作れることに感動しました」

「ブラジルでも運動会や盆踊りなどはよく知られていますが、日本には地域ごとにさまざまな祭りがあることも、新しい発見でした。特に、長野県の火祭りは、今回は映像で見ただけでしたがものすごい迫力で印象に残っています。帰国後は、和食の持ち寄り会や、水引きの講習会などのイベントをぜひやってみたいです」

理恵さん▶

在日ニッケイ人は今・・・

在日ブラジル人学校オリンピック大会 ブラジル総領事館他の主催ではじめて開催

―日本財団日系スカラーシップ留学生らがスタッフとして活躍―

開会式

日本各地のブラジル人学校を対象にしたスポーツイベント「在日ブラジル人学校オリンピック大会」が7月9日、静岡県袋井市の総合運動公園エコパスタジアムで開催された。このイベントは、ブラジル独立200周年記念事業の一環として在浜松ブラジル総領事館とCentro Educacional Sorriso de Criança(CESC)、滋賀バレーボール連盟(CAVOM)が共催し今年初めて開かれたもので、スポーツを通じた在日ブラジル人コミュニティの交流促進を目的として行われた。

「ブラジル人学校」と銘打ってはいるが、参加をブラジル人学校だけに限定せず、ペルーやアルゼンチン等スペイン語圏の生徒が通う学校にも声をかけたところ、当日は埼玉、群馬、茨城、静岡、愛知、岐阜、滋賀の各県にある南米系の学校16校より児童・生徒650人が参加したほか、静岡県西部の高校生も参加し、陸上競技、チェス、卓球、バレーボール、サッカーの5競技で順位を競い合った。参加した児童・生徒たちは、全力で楽しむことはもちろん、本気で競技することで勝つ喜びや負けることの悔しさを学び、スポーツをすること・体を動かすことの楽しさを全身で感じていた。

この大会に、陸上競技の運営スタッフとして関わっていた日本財団日系スカラーシップの修了生(11期生・陸上競技)でブラジル日系2世の矢崎シャーリー夏さんが、同スカラーシップの現役留学生たちに留学生会の活動の一環としてボランティア・スタッフとしての参加を呼び掛けたところ、23名の留学生が参加することとなった。留学生たちは、競技者の誘導や走り幅跳びの砂ならし、タイムキーパー、順位確認、会場の設営・撤収など、それぞれの持ち場で奔走した。はじめて開催される大会だったために運営面での課題も見られ、スポーツイベントの運営について未経験の留学生らが困惑するような場面もあったが、参加した留学生たちからは「はじめて日本のブラジル人学校と交流して、とても楽しかった」「色々ハプニングはあったが勉強になったし、次の機会があればまた参加したい」「楽しむことの大切さに気付かされた」等の感想が寄せられた。大会には、大使や総領事だけでなく、サッカー元日本代表選手のラモス瑠偉氏や、総合格闘家のホベルト・サトシ氏、ブラジルからこの大会のために駆け付けた卓球界のレジェンドで元オリンピック選手のウーゴ・オヤマ氏らが参加者を激励したほか、閉会式で参加者にメダルやトロフィーを授与した。

陸上競技

表彰台にあがる子どもたち

また、会場の外には、在日ブラジル人コミュニティを支援する団体や企業などがブースを出したほか、ブラジル料理店、アルゼンチン料理店などがフードトラックを出店して参加者や観客を楽しませていた。

ラモス瑠偉さんと記念撮影

南米レストランのフードトラック

NIKKEIS around the WORLD ～このヒトに聞く～ vol.10

シルバ・サントス・フェリッペさん

世界各地で活躍する日系人や日系団体のみなさん、もしくは日系人・日系社会に関わる活動している皆さんにお話を伺うコーナー、「NIKKEIS around the WORLD」。第10回にご登場いただくのは、ブラジル・サンパウロにある日本語学校「明日香塾」校長のシルバ・サントス・フェリッペさんです。非日系のフェリッペさんがどのようにして日本語を学び、日本語教師として学校を運営するに至ったのか。「前世は日本人だと思う!」と話すフェリッペさんに、恩師との出会いや、日本語・日本文化に対する想いについて伺いました。

プロフィール

明日香塾の創設者である林原和子先生(右)と。

国籍・世代:ブラジル・非日系
職業:日本語教師
ブラジル人の両親のもと、サンパウロ州で生まれ育つ。習字に興味を持ち、17歳より日本語学習をはじめる。高齢となった恩師が日本に帰国したことを機に、仕事を辞め日本語教師免許を取得。恩師がはじめた日本語学校「明日香塾」を引き継ぎ、日本語、日本文化を伝えている。

日本とのはじめての出会いは「特撮」

日本との出会いは、12、3歳の頃テレビで見た「世界忍者戦ジライヤ」とか「巨獣特捜ジャスピオン」とかの特撮モノ。ポルトガル語の吹替放送だったのですが、毎回、終わりの画面に「つづく」って日本語で出るんですよ。当時は読めなくて「なんだろうなぁ?」って気になっていました。その後、漢字に興味を持つようになって、書道を習い始めました。習字は今でも続けていますが、書き順にも意味があることや、文字が人の心を表していることなど、すごく興味深くて面白いと思いました。

17才のとき、通っていた公立学校に日本語のクラスがあって、そこで初めて日本語をきちんと勉強し始めました。その時の先生がすぐに辞めてしまい、別のところで勉強を続けたいと思っていたときにたまたま見つけたのが「明日香塾」でした。日本からブラジルに移住した一世の林原和子先生という方が始めた日本語学校でした。

最初は信用されていなかった

日本文化に興味はありましたが、当時私が住んでいた町からリベルダーデの日本人街までは車で2時間くらいかかり、ほとんど行ったことがなかったですね。日系人の友だちもいなかったし、日系団体があることは知っていたけれど、非日系の自分にはちょっと近寄りづらい場所だと思っていました。

林原先生は、私が初めて話した日本人でした。先生にとっても、私が初めての非日系の生徒だったので、最初は「なんでこんなに大きな(いかつい)ブラジル人が日本語を?」と、警戒していたと思います。先生が教室にお金をわざと出しっぱなしにして、私がそれを盗むかどうかを試したこともありました。「非日系に日本語はできない」と、はっきり言われたこともあります。そんな先生の気持ちもすごくよくわかります。でも「私は先生が思っているようなブラジル人ではないですよ」「人のものを盗っていけないことなど、両親からちゃんと教わっています」という話をして、先生との信頼関係が少しずつできていきました。その後、明日香塾には少しずつ、非日系の生徒が来るようになりました。

「明日香塾」が存続の危機に

林原先生は、日本語だけでなく、日本の文化も教えてくれました。何よりも、日本人の心、人としての在り方などを教わりました。

高齢になった林原先生が日本に帰国することになったとき、先生が50年間もの間ひとりで続けてきてくれたこの学校がなくなってしまうなんて嫌だ、どうしよう!と悩みました。当時私は24歳でしたが、この学校をどうにかして続けたいと思いました。先生に相談しましたが、ブラジル人の私がひとりで続けることは無理だろうと言われました。でも、クラブとしてでもいいから続けられないだろうかと考えました。先生が日本に帰国して一度学校は閉校となりましたが、4カ月後に、元生徒たちに電話やメールで「一緒に日本語を勉強するクラブとして集まらないか」と呼びかけました。

私は、集まった生徒たちからいつの間にか「先生」と呼ばれるようになっていきました。その後、日本語教師の資格を取り、明日香塾を引き継ぐと決めました。とにかく、明日香塾をなくしたくないという気持ちが大きかったです。

日本語は楽しい!

少しずつ口コミやインターネットで新しい生徒が集まるようになり、明日香塾では今、12才から65才までの44人が学んでいます。17人が日系人で、27人は非日系。マンガやアニメが好きだったり、日本文化が好き、日本に行ってみたいなど目的は人それぞれですが、みんなが一緒に楽しみながら勉強しています。私が話す日本語を先輩の生徒たちがポルトガル語で後輩たちに説明したり、先輩たちの日本語会話に早く混ざりたいと、新しい生徒たちが必死にがんばったり。

フェリッペさん(中央)と明日香塾の生徒たち

授業以外にも、習字、料理、ゲームやカラオケなどもしています。楽しみながらやることで、生徒たちはもっとやる気になります。今日もさっきまで授業をしていましたが、授業が終わっても帰りたくないと、教室に残っている生徒がたくさんいます。

言葉を勉強するときには、その背景にある文化も学びます。私の中に、「もっと知りたい」という想いがあって、その想いが今もずっと続いているんです。たまに生徒たちが、「先生、これは難しいよ〜」と言ったりしますが、そんな時は、「難しく考えないよ、面白いんだから!」と伝えて、漢字の成り立ちや歴史的な背景、知らなかったことを知ることの楽しさを伝えるようにしています。生徒には、楽しそうな表情で帰ってほしい。だから、とにかく楽しい学校にしたいんです。

日本語以上に、日本人の「心」を伝えたい

「楽しい!」という想いで続けているので、大変さはあまり考えません。もちろんコロナで人と会う事ができなかったり、授業ができなかったりした時は大変でした。どうしたらオンラインでも生徒の気持ちを引きつけられるかを考えて、漢字学習のための対戦ゲームも作りました。大変でしたけれど、そのおかげで今、オンラインで受講する生徒もできました。

学校というのは「場所」ではあるけれど、大切なのはその中身である「人間」であり「心」だということを、林原先生から学びました。経営する上でお金はもちろん必要だけど、それは後からついてくるものだと思っています。日本語を教える以上に、日本人の心を教えたいんです。そこを大切に伝えることで生徒たちが変わり、周りの人たちも少しずつ変わっていける。ブラジル社会を内側から変えていくこともできると思っています。

恩師との再会でかけられた言葉

先生が日本に帰国するとき、「2年後に必ず会いに行きます」と約束しました。それから2年経って、どうにかして日本に行けないかと考えていたときに、父親から「日本に行けるぞ!」と連絡がありました。なんと、宝くじに当たったというのです!そのおかげで生まれて初めて飛行機に乗り、日本に行って、林原先生に再会することができました。

先生は認知症が進んで、ブラジルのことをだいぶ忘れていましたが、私の手を握って「男は泣かないよ」と言いました。そして、別れ際に「もうフェリッペ君じゃない。フェリッペ先生ですね」と言ってくれました。その言葉の重み、その時感じた気持ちを忘れないように、がんばっています。

「あおいくま」の教えと明日香塾のこれから

先生が帰国する少し前に、「あおいくま」の話を聞かせてくれました。「あせるな」「おこるな」「いばるな」「くさるな」「まけるな」の頭を取って「あおいくま」としたもので、それ以来、何かあったときは必ず心の中で「あおいくま」を思い出すようになりました。

明日香塾では、私がデザインしたあおいくまのキャラクターを使っています。怒りたくなったときや壁にぶつかったとき、心の中で「あおいくま」と唱えると、落ち着いて「大丈夫」と思えるようになります。みんなであおいくまのぬいぐるみを作り、明日香塾のキャラクターとして愛されています。

生徒たちと作った「あおいくま」のぬいぐるみを抱えて

妻は愛知県出身の日本人。近い将来、日本で生活してみたいと思っています。生徒たちにも、必ず一度は日本を経験してほしい。だけど、非日系の生徒たちには日本で頼る伝手がないんですよね。幸い、学校を任せられるような後輩たちが育ってきているので、自分が日本で受け皿になれたらと思っています。日本でいろんなことを経験して、もっと楽しい教科書や教材を開発したい。それに、明日香塾の逆バージョンとして、日本で生まれ育ったブラジル人の子どもたちや日本人にポルトガル語を教えることもやってみたいです。

よく冗談で「私はもう日本に帰るから、あとは君たちに任せるよ」なんて言っています。でも冗談ではなく、私がいなくても明日香塾をこの先も続けられる人材が、しっかり育ってきていることが嬉しいです。

日系社会 Topics

対面イベントの開催、各地で徐々に再開

日本ではコロナ第7波の収束が見通せない状況が続いているが、その一方で感染対策や入国制限などの緩和も進みつつある。この秋、国内各地ではコロナ禍により中止やオンライン開催となっていたさまざまなイベントが、徐々に対面で開催されはじめている。

9月3日～4日には、国内有数の在日ブラジル人コミュニティとして知られる静岡県浜松市（会場:ギャラリーモールソラモ）にて、在浜松ブラジル総領事館主催の「ブラジリアンデー浜松」が開催された。今年はブラジル独立200周年の年でもあり、浜松在住のブラジル人だけでなく、日本人や近隣の外国籍住民など約1万人以上が来場しブラジル文化を堪能した。

9月10日～11日には、東京都渋谷区の代々木公園ケヤキ並木にて、「ブラジルサンバダンス・フェスティバル・イン・ジャパン2022」が開催された。会場にはブラジル料理の屋台や物販ブース等が立ち並び、ステージではサンバのダンスショーやファッションショーなどが行われ多くの観客を楽しませた。また、東京都練馬区の光ヶ丘公園では、10月16日にパラグアイ・フェスティバルが行われる予定だ。

そして、10月30日の前夜祭を皮切りに、10月31日～11月3日には、第7回世界のウチナーンチュ大会が沖縄で開催される。8月中旬から海外参加者の参加登録受付を開始しており、2016年以来6年ぶりに世界各地のウチナーンチュが沖縄に集結し、「世界ウチナーンチュの日」を祝うこととなる。

令和4年度外務大臣表彰

国際関係の様々な分野で活躍し、日本と諸外国との友好親善関係に貢献した個人や団体に贈られる外務大臣表彰の令和4年度受賞者が8月4日に発表され、当協会元理事でJICA横浜　海外移住資料館学術委員の柳田利夫氏（慶應義塾大学名誉教授）並びに当協会元評議員会議長で第61回海外日系人大会の基調講演を行い、令和4年度「国際日系デー」のオンライントークショー出演等で活躍された松本アルベルト氏（合資会社イデアネットワーク代表）がそれぞれ受賞した。

柳田氏は、長年にわたる日本移民史の研究を通じた日本人海外移住の歴史や移住事業に関する知識の普及、松本氏は、JICA日系社会研修員の来日オリエンテーションや海外日系人大会、インターネットサイト等を通じた対日理解の促進および内外日系社会に関する情報発信等における功績がそれぞれ評価された。

JICA横浜 海外移住資料館 企画展示「雄飛ふたたび－沖縄移民の歴史とウチナーンチュの絆（仮）」10月29日～2023年2月12日

戦前戦後を通じて移住が盛んに行われ、広島県に次いで多くの移民を送り出した、全国有数の「移民県」である沖縄。JICA横浜　海外移住資料館では、2014年に沖縄県との共催で実施した特別展示「雄飛－沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュ」から8年が経過した今年、沖縄が本土復帰50周年を迎えるにあたり、過去の展示を再構成し、新たなデータを加えて、沖縄移民の歴史と世界で活躍するウチナーンチュに改めて焦点を当てた企画展を開催する。

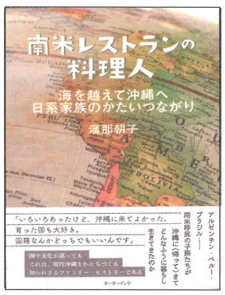
琉球王国時代から海に育まれ繁栄してきた沖縄の歴史と、そこから世界に羽ばたいたウチナーンチュたち、そして横浜の南米沖縄タウン鶴見や母県を含めた世界のウチナーンチュの今を紹介予定。

本の紹介

『南米レストランの料理人』

かつて沖縄から南米へ渡った日本人の子孫たちが、時を経ていま、多数沖縄で暮らしている。アルゼンチン、ペルー、ブラジルから沖縄にやって来た彼等・彼女等は、生まれた国で、そして沖縄で、どのように暮らし、生きてきたのか。

本書は、ベネズエラ人現代彫刻家との結婚により、1973年から約10年間にわたりベネズエラで生活・子育てを経験した著者が、日本に帰国後、沖縄で出会った南米料理レストラン10店舗・11名にインタビューしてまとめたルポタージュ。家族のつながり、団結の強さや、異文化の戸惑いの中でも明るくたくましく生きる人々の姿が、それぞれのファミリー・ヒストリーを通じて生き生きと描かれている。



著者:漢那朝子　発行:ボーダーインク
四六判・304P・日本語
価格:2,200円（税別）
発行日:2021年12月25日
ISBN: 978-4-89982-417-6

NIKKEI Network NO.54 2022 SEP.
海外日系人協会だより
発行／（公財）海外日系人協会　〒231-0001　神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2F
TEL:045-211-1780　FAX:045-211-1781
E-mail:info@jadesas.or.jp　URL:www.jadesas.or.jp　編集発行人／椿 秀洋

日本で安心して過ごす為に！
Health and Life Insurance for foreigners in Japan
短期滞在・日本在住・企業就労の外国人向け医療・生命保険

短期滞在・在住者向け保険
VIVA MED-S・VIVA MED-30
(Life and Health coverage)
・短期滞在には医療保障最大100%のVIVA MED-S
・在住には医療保障30%のVIVA MED-30がそれぞれオススメです。

オススメ
外国人社員・スタッフ向け保険
VIVAライト・VIVAガード
・年間保険料12,000円（1ヶ月あたり1,000円）からと手頃な価格で用意。
・外国人スタッフの福利厚生の一環としてオススメです。

その他保険プラン
外国人留学生向け保険
外国人技能実習生・特定技能1号向け保険
LCI家財総合保険
LCI日本人向け生命保険
LCI入院費用保険

For more information, call:
TOLL FREE: 0120-656-684
TEL: 046-265-6685
Visit www.vivavida.net

VIVA VIDA!®
少額短期保険会社
(株)ビバビーダメディカルライフ
VIVAVIDA MEDICAL LIFE CO., LTD
関東財務局長（少額短期保険）第51号